HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「じゃん」の統語的特徴と語用論的機能
Author(s)	大山, 隆子
Citation	国語国文研究, 160, 50(17)-37(30)
Issue Date	2023-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91667
Type	journal article
File Information	160-3.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「じゃん」の統語的特徴と語用論的機能

大　山　隆　子

はじめに

文末に使用される「じゃん」は特に若い世代を中心に「これ、いいじゃん。」のような使用が観察される。国文法においての所謂「じゃん」の語源は、「ではない（か）」と考えられており、否定疑問の形式で、「確認」の用法を持つとされている。また、「じゃん」の成り立ちを詳しく見ると、「じゃん」にはコピュラの「だ」と否定の「ない」が内包されていることがわかる。本論文では、文末表現「じゃん」が、「認識確認要求」および「認識受容要求」の機能を持つものとし、また、会話に参加する際の話者の基本的な「評価（感情・態度／姿勢）（スタンス）」を標示する「スタンスマーカー」として機能しているものと考える。分析するにあたり、先ず「じゃん」の形式について、成り立ちを含めた統語的特徴を記述した上で、「じゃん」の語用論的機能を分析する。語用論的機能の分析には、Du Bois（2007）のスタンスの枠組み及び、会話参加者間の距離の調整においてスタンスと関連性を持つ Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論を援用する。

1．「じゃん」の統語的特徴

1.1 「じゃん」の統語的特徴と先行研究

井上（2001：34-50）では、複合辞「じゃん」の成り立ちについて記している。先ず、「じゃん」の構成要素である「じゃ」を「だ」及び「や」と共にたどると、平安時代の「にてあり」に遡るとし、「にてあり」が「であり」になり、その後「である」となり、室町時代に「である」の「る」が脱落し「であ」が現れ、室町時代以降「であ」の冒頭の子音が弱まり「ぢゃ」になったが、更にダ行の「ぢ」とザ行の「じ」の区別がなくなった為、子音がダ行からザ行に弱まり「じゃ」になったと考えられるとしている。そして、「じゃ」の子音はさらに弱くなり、「や」になり、「じゃ」から「や」が生まれたのは江戸時代末期とも言われていると述べている。また先ほどの「であ」の母音が簡略化され「だ」も生じたととしている。以上をまとめると、以下のようになる。

(1) にてあり→であり→である→であ┌→ぢゃ→じゃ→や
　　　　　　　　　　　　　　└→だ

次に「である」の意味の「だ」「じゃ」「や」が確立すると、それが基盤となり、「ではない」の「でない」「じゃない」「やない」が成立し、さらにそれを背景とし、「ではないか」の「じゃん（か）」「やん（か）」が生じたとしている。つまり、「じゃん（か）」の語源は「では＋ない＋か」だと考えられるとしている。否定疑問の形式である。

次に二つ目の構成要素である「ない」の部分では「じゃ＋ない」「や＋ない」の「ない」が「書かない」を「書かん」とするように、「じゃ＋ん」「や＋ん」の「ん」に変化したと述べている。最後に三つ目の構成要素「じゃんか」の「か」であるが、「じゃんか」「やんか」から「か」の脱落により、「じゃん」「やん」になったと見られている[1]。

これらの統語的記述からわかるのは、「じゃん」には、コピュラの「だ」と否定の「ない」が内包されているということである。

1.2 「じゃん」の前接形式

次に、「じゃん」の前接形式を見るが、「じゃん」が、どのような前接要素に接続できるかを下記の表1にまとめる。

表 1.「じゃん」の前接形式「前接要素＋じゃん」

前接要素	例	接続可能か
名詞	学生	○
名詞＋コピュラ	学生だ	×
形容詞	高い	○
動詞辞書形	読む	○
動詞意向形	読もう	○
動詞テ形	読んで	×
動詞命令形	読め	×
敬体	読みます	×
疑問形	読みますか	×
否定形	読まない	○

「じゃん」は「学生じゃん」「静かじゃん」と接続できるが、「学生だ」「静かだ」には接続できない。これは、「じゃん」の成り立ちに関係している。「じゃん」は先に述べたように「にてあり→であり→である→だ」と変化していったと考えられていることから、すでに「じゃん」には「だ」が内包されているため、「だ」が重複する「学生

[1]「じゃん」については、山梨、静岡、神奈川、愛知（三河）など、各地域での方言の使用も関係していると考えられるが、本発表では東京都をはじめ、日本の広範な地域で「じゃん」が使用されているものと考え、方言の問題としては、扱わないこととする。

だ」「静かだ」には接続できないものとみる。また、「動詞テ形」「命令形」「疑問形」には接続できない[2]。「じゃん」は「敬体」に接続すると不自然になる。また「じゃん」は平行する丁寧体を持たない。「でしょ」「でしょう？」は機能的には近いが、すべて言い換えがきくわけではない[3]。また、上記表の接続のほか、「じゃん」は「行ったじゃん」のように「た形」の他、「行ったらしいじゃん」「行ったかもしれないじゃん」「行ったにちがいないじゃん」などや「行ったようじゃん」「行ったみたいじゃん」「行ったそうじゃん」「行ったはずじゃん」「行ったんじゃん」など、いわゆる認識モダリティに接続できる。その中でも「らしい」「かもしれない」「にちがいない」はそのまま接続できるが、「ようだ」「みたいだ」「はずだ」「のだ」は、「だ」が脱落する。

1.3 「じゃん」及び「終助詞」の組み合わせ順序と制約

加藤（2006：124-126）では、終助詞同士を組み合わせて使う際の組み合わせの順序に制約があるとし、以下の表2のようにまとめている。

表2. 終助詞・組み合わせ順序 加藤（2006：126）

1類	2類	3類
わ		な
か		ね
とも	よ	さ
な		ぜ

表3. 「だ」「や」「じゃん」を含めた組み合わせ順序

0類	1類	2類	3類
だ	わ		な
や	か	よ	ね
じゃん	とも		さ
	な		ぜ

上記表2では、組み合わせの順序に制約があり、左から右への順序のようになり、逆行する組み合わせはないとしている。この制約で言うと、「わよ」「わね」「かね」「ともよ」「ともさ」はあるが、「ねよ」「さわ」などはなく、「わぜ」「よさ」「よぜ」のように、この順序でも存在しない組み合わせがあるとしている。更にこれらの終助詞に本研究の「じゃん」を組み合わせるとした場合、順序をみると終助詞は「じゃん」の前接組み合わせでは、「おいしいわじゃん」や「おいしいかじゃん」のように不成立になる。つまり、「だ」「じゃん」「や」は終助詞の1類より、前に位置するものと考えられる。

---

[2] 此の節では、統語論的な特徴を述べているが、「じゃん」には「だ」が内包されており、「だ」は「命題内容」を述べる場合の使用になり、「発話内力」を持つ「読んで」「読め」「読むか」などには、基本的には接続できないものと考えられる。

[3] 三宅（2011：212）「命題内容の要求」の例文（63）「待ったでしょう、随分？」は「じゃん」に置き換えると不自然である。しかし、三宅が「命題内容の要求」の例に挙げているものの中でも、「じゃん」で言い換え可能なものもあり、更なる分析を必要とする。

上記の「終助詞の組み合わせ順序」表２を参考にすると、表３の「０類」の位置に「じゃん」は現れるものと考える[4]。

２.「じゃん」の意味用法と先行研究

蓮沼（1995：393-396）では、「だろう」「じゃないか」「よね」の確認要求表現について、分析している。そして「じゃないか」の意味用法として以下の３つにまとめている。

①共通認識の喚起
（2）同級生に加藤さんっていたじゃないか。背の高い男の子。
②共通認識の要請
（3）だから、言ったじゃないの。あの人には気をつけなさいって。
③認識生成のアピール
（4）なにはともあれ、合格できたんだから、めでたいじゃないか。

また、早野（1996：91,92）では、
「じゃん」の上昇イントネーションの場合：「聞き手に念を押す、確認する」表現
「じゃん」下降調のイントネーションの場合：「相手に自分の意見を強要する・強い確認」を表す表現としている。

さらに、三宅（2011：195-232）では、「確認要求」の用法について、「話し手にとって不確実なことについて、聞き手によって確実にしてもらうための確認を要求すること」としている。

そして、以下のように下位分類型化している。

確認要求
- **命題確認の要求**：確認の対象が命題の真偽
  （命題が真であることの確認を聞き手に要求）
- **知識確認の要求**：確認の対象が命題によって表される知識（情報）
  （当該の知識を聞き手が有していることの確認を要求）

また、上記「知識確認の要求」には、下記の二つの機能があるとし、また、その２つとは別に、「だろう」では表すことのできないもう１つの「同意要求」があるとしている。

---

[4] 終助詞が「じゃん」に後接する場合「おいしいじゃんか」「おいしいじゃんよ」は許容されるが「おいしいじゃんな」「おいしいじゃんわ」「おいしいじゃんよね」などは不自然となり全ての後接が可能なわけではない。

知識確認の要求

- **①潜在的共有知識の活性化**（聞き手の知識を確認することにより、話し手と聞き手が潜在的に共有していると仮定される知識を活性化させる機能を有する。）
- **②認識の同一化要求**（聞き手の知識を確認することによって、聞き手に話し手と同じ認識を持つことを要求する機能を有する。）

同意要求：話し手が認識していること（命題内容）の「同意」を聞き手に求めていることが表されている要求。（話し手にとって、不確実なことは「命題」および、「知識」のレベルにおいても存在しない[5]。）三宅（2011）では、これらを含めて、「確認要求的表現」としてまとめている。

3．「じゃん」の語用論的機能と先行研究

加藤（2015：27–56）では、語用論と文法論の観点から、発話の中で聞き手に作用する力（force）を以下の２つに分けて記述する言語学的な枠組みを提案し、疑問文を分析している。

①言語形式に由来する作用……発話的な力（α）
②発話の命題内容に由来する作用（発話の機能を文脈からの推論によって計算する）
……発話内的な力（β）

そして「命題確認」や「知識確認」は発話内的なものに分類するとしている。

次の表は加藤（2015）「疑問文の種別と二つの力のまとめ」から「確認要求」に関する部分を抜粋したものである。

表 4. 加藤（2015）による「疑問文の種別と 2 つの力のまとめ」から、「確認要求」の部分を抜粋[6]

種別	α 発話的な力	β 発話内的な力
通常の疑問文	聞き手に対する回答要求をする	当該命題の真理値か欠落に関する情報提供
確認要求①（命題確認）	回答要求を残しつつ、応答要求に重点	
確認要求②（知識確認）	回答要求を抑制し、応答要求に転換	相手が当該命題を活性化

[5]「確認要求」においては、話し手にとって、何らかの不確実なことを、聞き手によって確実にしてもらうことが表されるものである。これが「同意要求」と異なる点である。「同意要求」は、話し手が確実であると認識したことについて、聞き手に同意してもらうことを求めたものと言える。

[6] 詳しくは加藤（2015：53）の表 1、「疑問文の種別と 2 つの力のまとめ」を参照のこと。

4．先行研究の問題点と本研究

早野（1996）では、イントネーションで確認要求の区別を行なっているが、イントネーション区分を上昇調と下降調の二つに区分している。本研究では詳しく分析すると下降しないものみられたことから。本研究では下降しないものを「非下降イントネーション」として「上昇・非下降・下降」イントネーションの3区分とする。また、早野（1996）では「じゃん」の使用状況が明確になっていない。

また、蓮沼（1995）では、確認要求の意味用法について分類しているが、本研究では文脈を拡大し、分析する必要があると考える。さらに、三宅（2011）では、意味論と語用論のインターフェイスという観点から､確認要求を定義している。本論文では、確認要求を考える上で新たに「対立関係の有無」と「認識要求をさらに受容するように要求する受容要求」を設ける。その上で、語用論的分析に重点を置き、加藤（2015）も参考にし、Brown & Levinson（1987）「ポライトネス」理論の枠組みを使用し、参加者間の距離の調整を分析する。さらに、話し手の評価（感情・態度／姿勢）を Du Bois（2007）「スタンス」の枠組みを使用し分析を行う。

5．本研究における「じゃん」の意味用法

本研究では､「じゃん」の用法として以下の二つにまとめる。これまでの先行研究とは異なり、①の認識確認要求には、話し手と聞き手の間に対立関係がないものとし、また、下記②の「認識受容要求」を新たに設ける。「受容要求」とは、①の「確認要求」とは区別し「確認要求」に止まらず､「話し手の認識要求を、相手が受け入れるべきだとする要求」とする。

①認識確認要求（上昇・非下降イントネーション）

認識確認要求とは、「認識が同一であるかを確認する要求」とする。

「認識確認要求」では、「話し手と聞き手の間に対立関係がないと話し手が判断し、両者の間の認識が同一であるかの確認要求のみを行う場合」とする。

②認識受容要求（非下降・下降イントネーション）

認識受容要求とは、「確認要求」とは異なり、「話し手の認識の受容を相手に求める要求」とする。「認識受容要求」では、「話し手と聞き手の間に認識の異なりがあると話し手が判断し、話し手の認識要求を相手が受け入れるべきだとする要求」とする。

6．スタンスマーカーとしての「じゃん」と先行研究

Du Bois（2007）では、スタンスティキング（stancetaking）のアプローチを間主観的で対話的な社会的行為であるとし、スタンスの三角形（The stance triangle）（Du

Bois 2007: 163）の下記の図を示し、主体（話者）と会話の対象（事柄）と会話参加者の関係において、評価する（evaluate）、対象に対する立ち位置を決める（position）、会話参加者間での立ち位置の調整をする（align）ということが、同時に行われているとしている。スタンスティキングは、話者一人で決定されるものではなく、会話参加者間において、交渉などを通し、調整されていくものであるとしている。

本論文では、文末に使用する「じゃん」が会話参加者のスタンスを示すスタンスマーカーとして機能しているものと考え、Du Bois（2007）の枠組みを参考に、会話の中でどのようなスタンスを示しているかを分析する。なお、本論文では、スタンスを「話し手、および会話参加者が言語行為を通して指標する評価（感情・態度／姿勢）および位置付け」とする。また、これらを指標する機能を持つ標識をスタンスマーカーと呼ぶ。これまでの研究では、文末表現「じゃん」が話し手のスタンスを標示するという研究はまだ数少ないと考える。

また、先に述べた「じゃん」の統語的特徴を鑑みると、「じゃん」の内部には「だ」が含まれており、形式的には命題を形成し、命題内容を述べるものであるが、スタンスマーカーとしての「じゃん」は会話をする際の話者の基本的評価（感情・態度／姿勢）を表す機能を持つと考えられることから、「じゃん」においては、形式と機能の齟齬がみられると考えられる。

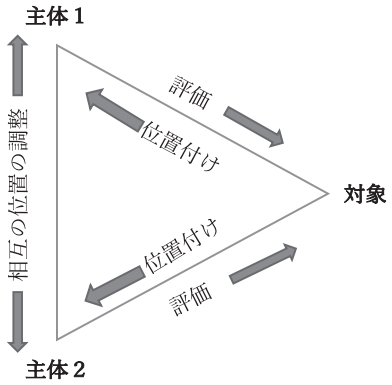

図 1. スタンスの三角形（Du Bois 2007, p. 163）

本研究では、「じゃん」の語用論的機能の分析にあたり、スタンスマーカーとして「じゃん」が指標する話者のスタンス、会話参加者間の距離の調整とフェイスリスクの関連からポライトネス理論の枠組みを援用し、分析を試みる。

7．分析事例

会話例 1

1 姉：　どっちよ？
2 アキラ：右、右。
3 姉：　なんで？
4 アキラ：あっ？
5 姉：　なんで、こっちなのかって聞いてんのよ。
6 アキラ：①だって姉ちゃん、ピンク好き**じゃん**よ。
7 姉：　そうよ。
8 アキラ：②だから、そっちでいい**じゃん**。
9 姉：　明日ピンクの服着て行こうと思ってんだけど。
10 アキラ：うん。
11 姉：　ピンクの服着て、ピアスもピンクじゃ、ピンクピンクになっちゃうじゃないのよ。
12 アキラ：③じゃ、そっちの青にすりゃいい**じゃん**よ。
13 姉：　じゃ、なんでさっきピンクって言ったのよ。
14 アキラ：もうなんだよ。めんどくさいなあ。
15 姉：　もうほんとに使えないわね。あんたって子は。ったく、もう。

『ピアス』（「紙兎ロペ」（フジテレビ放送））

7.1　分析 1

会話参加者：姉と弟
会話の対象となる事柄：姉のピアスの選択
フェイスリスク：小（家族関係）
力関係：姉＞弟
姉からの指示：デートに身につけていくピアスを選択せよ。

7.1.1 「じゃん」の意味用法

①アキラ：だって、姉ちゃんピンク好き**じゃん**よ。（非下降イントネーション）
（ピンクが好きだよね。好きだろう。好きじゃないか。認識確認要求）
姉：　そうよ。

②アキラ：だから、そっちでいい**じゃん**。（非下降イントネーション）
（そちらでいいじゃないか。そちらでいいと私は思う。認識受容要求）
姉：　明日ピンクの服着て行こうと思ってんだけど。…（中略）ピンクピンクになっちゃうじゃないの。

③アキラ：じゃ、そっちの青にすればいいじゃんよ。（下降イントネーション）
（青にしたらいいじゃないか。青にすればいいと私は思う。認識受容要求）
姉：　じゃ、なんでさっきピンクって言ったのよ。

7.1.2　スタンスマーカーとしての「じゃん」の機能

分析例１における一行目姉の「どちらかを選択せよ」という指示に対し、弟は対象に対し「右がいい」との評価をし、姉の指示に従う位置付けを行う。しかし、本心は関心がなく、どちらでもいい態度。弟の評価に疑念を持つ姉は、理由を述べるように再度指示する。弟は姉が好きな色を「ピンク好きじゃんよ」と「じゃん」を使用し、ポジテイブ・ポライトネス・ストラテジーにおける「共通の基盤」で認識確認を行い、更に「よ」で、根拠がある理由を主張し、FTA（フェイス威嚇行為）を避けて会話を終わりたいと考えている。姉はその認識に一応同調し、「そうよ」と応答する。しかし、その後の弟の「だから、そっちでいいじゃん。」は、面倒な姉の要求に対し、苛立ちのスタンスを「だから～じゃん。」で示しており、「じゃん」を使用することにより、強い認識受容要求をし、姉への不満なスタンスを示している。さらに姉の受容できない態度に対し「じゃ、そっちの青にすればいいじゃんよ。」と、面倒でどちらでもいいから、早くこの会話を終えたい気持ちを示している。姉はこの弟の発話から、なげやりで適当な選択しかしていない弟の態度を感じ取り、受容できず、「ったく、あんたって子は使えないわね」と強いFTA（フェイス威嚇行為）で見下す発話となり、お互い対立して終わる。

会話例２

１姉：　ほら早く！
２アキラ：はい、3000円。
３姉：　どうしたの。このお金？
４アキラ：えっ？母ちゃんからもらった。
５姉：　はあ？なにやってんの。お母さんの誕生日プレゼント買うって言っちゃったの？
６アキラ：ああ。
７姉：　もう、ちょっと、なんで言っちゃうのよ。もう、はあ？
８アキラ：①しゃあねえじゃん。何に使うか言わねえと、小遣い、くんねえんだし。
９姉：　はあ？
10アキラ：いや、うそついてねえし。っか、とにかくお金もらえたんだし。
②いいじゃんよ。
11姉：　ああ、もう、はあ？もう…。

『誕生日プレゼント』（「紙兎ロペ」（フジテレビ放送））

7.2　分析２

会話参加者：姉と弟（アキラ）

フェイスリスク：小
力関係：姉＞弟
会話の対象となる事柄：母の誕生日プレゼントを買うお金の徴収
姉からの指示：プレゼント代を渡せ。

7.2.1 「じゃん」の意味用法

①アキラ：しゃあねえ**じゃん**。何に使うか言わねえと、小遣い、くんねえんだし。
（非下降イントネーション）
（仕方ないじゃないか。仕方ないだろう。仕方ないと私は強く言いたい。認識受容要求）
姉　　：はあ？

②アキラ：いや、うそついてねえし。っか、とにかくお金もらえたんだし。
いい**じゃん**よ。　（下降イントネーション）
（いいじゃないか。いいだろう。いいと私は強く言いたい。認識受容要求）
姉　　：ああ、もう、はあ？もう…。

7.2.2 スタンスマーカーとしての「じゃん」の機能

分析例２の一行目、姉の「早くプレゼントを買うお金を渡しなさい」との指示により、「3000 円」を渡す弟。弟のお金の出所に疑問を感じた姉は、「どうしたのこのお金」と弟に対しそれを疑い、理由を述べよと指示する。それに対し、弟は、母への誕生日祝いを買うお金であるにも関わらず、「母ちゃんからもらった」と無神経に答え、弟の非常識な認識に対し、受容できずに再度、強く弟に確認を迫る。それに対し、弟は「しゃあねえじゃん。何に使うか言わねえと、小遣い、くんねえんだし。」と強い認識受容要求を行い、姉に反発するスタンスをとる。そして、自分の行為をさらに正当化しようとする態度で、「いや、うそついてねえし。っか、とにかくお金もらえたんだし。いいじゃんよ。」とお金がもらえたからそれで良いとの認識を主張する。②で「じゃん」を使用しているが、その前にさらに強いスタンスを標示する「し」を２度使用している。「し」の使用[7]と比較すると最後は少し反発を抑えたい気持ちがあり、「受容要求」も「じゃん」を使用することにより弱化していると考えられる。

しかし、それを聞いた姉は、弟の呆れた認識に対し、怒りで言葉にならない。お互い対立した形で会話が終結に向かう。この後姉は、台所にいる母のところへ行き、母が弟に渡したお金が 5000 円であることがわかる。姉に渡したのはその内の 3000 円のみで、姉の怒りは頂点に達する展開になる。

---

[7] 大山（2017）において、接続助詞「し」が、談話標識として使用され、「判断済みの態度」を示し、聞き手と話す余地を残さず、反論に使用できるとの分析を行っている。

会話例 3

1 姉　　：じゃ、あんた音楽やって。
2 アキラ：はあ？
3 姉　　：ブンブンブンってやつ。で、こうおしゃれなランウェイ感、出して。
4 アキラ：いや、ランウェイ感とか、わかんねえし。
5 姉　　：いい。本気でやんなさいよ。ふざけたら、承知しないから。
6 アキラ：えっ？なんなんだよ。
7 姉　　：じゃ、音楽スタート！
8 アキラ：はああ。（面倒だと思いながらも、真面目にやる。）
　　ブンブンブンブン、ランウェイ。ブンブンブンブン、ランウェイ。
9 姉　　：（意外と真面目にやっている弟を見て）
　　ちょっ、ちょっ。ふざけるなって言ったでしょう。（笑）
10 アキラ：①いや、ふざけてねえ**し**。
11 姉　　：②取りにきた**じゃん**。笑い。
12 アキラ：イヤイヤ。
13 姉　　：③取りにきた**じゃん**。（笑）
14 アキラ：やらせておいてなんだよ。
15 姉　　：ハハハ。ねえ、もう一回やって、ブンブンブン（笑）
16 アキラ：えっ。
17 姉　　：ブンブンブンブンブン、ハッハッハ…（笑）

『ランウェイ』（「紙兎ロペ」（フジテレビ放送））

7.3　分析 3

会話参加者：姉と弟
フェイスリスク：小
力関係：姉＞弟
会話の対象となる事柄：モデル歩き練習の音楽
姉からの指示：モデル歩きの練習をするので、その音楽を口真似で入れよ。

7.3.1 「じゃん」の意味用法

②姉　　：取りにきた**じゃん**。笑い。（非下降イントネーション）
（笑いを取りにきたでしょう。笑わせようとしたでしょう。認識確認要求）
アキラ：イヤイヤ。
③姉　　：取りにきた**じゃん**。（笑）（非下降イントネーション）
（笑いを取りにきたでしょう。笑わせようとしたでしょう。認識確認要求）
アキラ：やらせておいてなんだよ。

7.3.2　スタンスマーカーとしての「じゃん」の機能

分析例 3 において、9 行目から姉は弟のアキラを笑いの対象としてからかっている。

フェイスリスクの大きい関係ではフェイスを傷つけてしまう可能性もあるが、会話参加者間の関係性は家族であり、親密な関係である。姉は 11 行目において、「取りにきたじゃん。→（非下降）笑い。」と「じゃん」を使用している。「じゃん」は「ではないか。」の省略形であるとされているが、「じゃん」は丁寧体を持たないことからも仲間や親しい関係つまりフェイスリスクの小さい関係での使用に限られる。また、会話参加者間のスタンスは、姉は弟のアキラが、意外と真面目にやっているのが、かえって可笑しく「真面目にやんなさいよ。」と軽く認識確認し、敢えてからかう。それに対してアキラは、姉の「ふざけている」という認識には同調しないスタンスで「ふざけてねえし。」と敢えて強い反発の態度を「し」で示している。「し」もフェイスリスクの小さい関係での使用に制限される。その発話に対し、姉は再び「笑いを取りにきたじゃん。（笑いを取ろうと考えたでしょう。）」と「じゃん」を使用し、弟が思いの外、真面目にやっているので、かえっておかしく笑ってしまったという気持ちを示している。上記の②の認識確認要求の発話を繰り返し、笑いが止まらない共感のスタンス。この状況での「じゃん」の使用は、断定を避け、軽く確認し、緊張を緩和させ、相手に共感を示す、スタンスマーカーとして使用されているものと考えられる。冗談、からかいの行為が伴う。

8．ポライトネスとの関係

「じゃん」は、フェイスリスクの小さい親しい関係での使用に限られる。本研究の対象である「じゃん」は、先に述べた「じゃん」の成り立ちの中で、「じゃん（か）」の「か」の脱落により、「じゃん」が生じたとされていたことからも、本来の疑問表現である「ではないか」では、あからさまに相手に「質問」あるいは「断定」し、その答えを要求することになる。これは相手のネガテイブ･フェイスを侵害することになり、その場合は、聞き手の FTA（フェイス威嚇行為）の負担は大きい。しかし「疑問形式」を使用せず、「か」を脱落させ「じゃん」を使用すると「でしょう」と、軽く確認する意味合いにもなる。従って、「じゃん」は、FTA（フェイス威嚇行為）を緩和し、「質問」や「断定」の明確な機能をぼかすヘッジ（hedge）としても使用されていると考える。ヘッジは普通、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーとして使用されるが、「じゃん」は、フェイスリスクの大きい関係での使用は制限される。「じゃん」は、発音の簡略化による使用の容易さも影響しているものと思われるが、近接化の機能を持つものと考え、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーとして機能していると考える。しかしこれらの近接的な関係の中でも「じゃん」が、ある時には相手のフェイスを保護しようと遠隔的に機能している場合も見られた。

9．分析結果のまとめ

「じゃん」の語用論的機能

「じゃん」はスタンスマーカーとして機能している。「じゃん」は敬体をもたないこ

とから、フェイスリスクの小さい関係、友人や家族などの近接関係での使用に限られる。しかし、その中でもイントネーションを利用し、話し手の様々な評価（感情・態度／姿勢）を表していることがわかった。分析事例の中、事例１及び２では「じゃん」で指標されたのは「不満」「反発」の感情を表明しており、対立する関係が見られた。さらに、事例２の①では「じゃん」の使用により受容要求を弱化させているのが見られた。事例３においては「じゃん」で指標されているのは「緩和的」感情を表し「共感」のスタンス、「冗談を言う」「からかう」などの行為がみられた。また「じゃん」の使用は会話参加者間の距離の調整も動的に行い、近接的な関係の中でも、ある時は、FTA（フェイス威嚇行為）を行い、強い不満の感情を伝える場合に使用しているが、反対に相手のフェイスを保護しようと遠隔的に機能し、発話内容を弱めて伝えようとする場合にも機能していることがわかった。

分析結果から、「じゃん」のスタンスマーカーとしての機能をまとめると、基本的には近接的な関係の中で、話し手は会話参加者と気楽なスタイルで会話を行いたいという姿勢が見られる。強い発話内容の場合でも、断言を避け、自分の発話を軽く伝えたい話し手の基本的なスタンスが読み取れる。

表 5. スタンスマーカーとしての「じゃん」の語用論的機能

会話のスタイリング標示	気楽なスタイルで会話を行う姿勢
「じゃん」が指標するもの 話し手の評価 （感情・態度／姿勢）	認識受容要求→不満・反発……対立する行為 認識確認要求→緩和的・共感…冗談を言う、からかう行為
ポライトネスとの関係	フェイスリスクの小さい親しい関係 近接化 ポジティブ・ポライトネス（hedge）として使用 発話内容を軽く伝える

10. まとめと今後の課題

文末に使用される「じゃん」の統語的特徴と語用論的機能について見てきたが、「じゃん」の統語的特徴として、「では＋ない＋か」が「じゃ＋ん＋か」となり「じゃん」と変化してきたものとされている。基本的には否定疑問文を用いた「確認要求」であるが、本研究では「確認要求」である「認識確認要求」と「確認要求」とは異なる「認識受容要求」とに分類した。

また、「じゃん」は話し手の会話参加時の基本的な評価（感情・態度／姿勢）を標示するスタンスマーカーとしての機能を持つと考える。また、「じゃん」は発音の簡略化とそのイントネーションの違いを利用し、軽い「認識確認要求」では「応答」がなされ、共感・場を緩和させるスタンスを表し、強い「認識受容要求」で、会話参加者への不満・反発のスタンスも表すことができると考える。しかし、統語的特徴を鑑みると、「じゃん」の内部には「だ」が含まれており、本来、形式的には命題を形成し、命

題内容を述べるものであるが、スタンスマーカーとしての「じゃん」は会話をする際の話し手の評価（感情・態度／姿勢）を表しており、「じゃん」においては、形式と機能の間に齟齬が見られるものと考えられる。

また、ポライトネスとの関係において、「じゃん」は、ポジティブ・ポライテトネスのストラテジーのヘッジ（hedge）としても使用され、フェイスリスクの小さい親しい間柄での使用に制限される。「じゃん」は強い回答要求を軽い認識確認要求にする機能を持つ。「か」が付加される疑問形式であるなら、相手に回答を要求し、相手のネガテイブ・フェイスを脅かすことにもなるが、「～じゃん（か）」の場合は回答要求は抑制され、「～じゃん（ϕ）」の場合は、相手に応答の責任を負わす圧力を回避できる。今回の分析では、これまでの統語的特徴に加え、語用論的機能の分析に、ポライトネス理論、更にスタンスの枠組みを取り入れることにより、認知的な研究にも結び付けられるものと考える。今後は、若い世代が、スタンスの機能に対応しやすく、話し手のスタンスを文末表現を駆使し、微妙に調整する傾向にあるのではないかと考えられることから、他の文末表現での分析にも広げていきたいと考えている。

（参考文献）

井上史雄（2001）『日本語ウオッチング』岩波書店

大山隆子（2017）「「し」の機能―「よ」「から」との比較を含めて」『北海道大学大学院文学研究科　研究論集』第 17 号：135-155

加藤重広（2015）「発話的な効力と発話内的な効力」『日本語語用論フォーラム 1』ひつじ書房

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為―「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法―」仁田義雄編『複文の研究　下』くろしお出版

早野慎吾（1996）『首都圏の言語生態（地域語の生態シリーズ関東篇）』おうふう

三宅知宏（2011）『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版

Brown, P. & Levinson, S. 1987 *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.

ペネロビ・ブラウン、スティーブン・C・レヴィンソン（田中典子監訳、斎藤早知子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳）. 2011.『ポライトネス　言語使用における、ある普遍現象』研究社

Du Bois, J. W.（2007）“The stance triangle.” In R. Englebretson (ed.), Stancetaking in Discourse Subjectivity, Evaluation, Interaction. Amsterdam: John Benjamins, 139-182.

（おおやま　たかこ・北海道大学大学院専門研究員）